

「海棠に託し」

巷で散りつくした桜のあとを継ぐように、縁側から眺める庭には海棠が映えた。細い幹をのぼった末に淡紅色の樹冠がひらく。天地構わず色を向ける桜とちがって、どの花もしつとりと俯いている。もう来ない人を待ちつづけているような慎みを醸していて、春のおとずれを告げるにはやや陽気さに欠けるように思われたが、毎年この時期、庭に咲くのは隅に植わった一本の海棠と決まっていた。

一季に一種というのが祖父のこだわりだった。だから海棠の次を受ける藤も、今は蔓を絡ませた塀の上で、薄紫の蕾をまだ咲かせずに、猫がじゃれるのに付き合いながら待っている。

ところが今年は敷き詰めた砂利のあいだに雑草が目立つ。石塀の陰にはドクダミの濃緑が茂り、随所で蒲公英が黄色い冠を誇る。祖父が見つけければ、ドクダミも蒲公英も、調和を乱すといって根ごと引っこ抜かれてしまったことだろう。

けれども啓介にとっては多少の雑草など他愛もないことに思えた。むしろ庭というものを自然から切り抜いたもうひとつの世界と捉えれば、蒲公英なんかは、海棠の雲をうっとりで見上げるハレ着の人にも見立てられるじゃないか。塀で囲った内側で、抜いたり植えたり、人の手で圧倒してしまうほうが、よほど自然を尊んでいない……と、そこまで考えたところで考えている内容ほど熱が入らない。ぼんやりと過ごすしかない時の余白を埋めるために考えを強いていただけだとわかって、息をついた。

蕾を弄るのに飽きたのか、猫が身体をぐんと下に伸ばし、塀を降りて啓介の座る縁側へ向かってきた。大儀そうに砂利を踏みながら、音は立てない。尻尾

はだらりと提げている。額に茶色い菱形模様をつけた三毛だった。妻によると、祖父が庭に立てなくなったころから棲みつきはじめたのだという。

啓介は縁側から半身を乗り出して手を伸ばし、小刻みに舌を鳴らしながら指先を震わせ誘ってみた。だが三毛は、啓介の手が届くかどうかのところ、急に舵を切って、縁側沿いを裏口のほうへ歩いていったかと思うと、これもちょうど届かないところではたと立ち止まり、沓脱石の角へ頭をこすりつけはじめた。

なんだよ。と啓介は肛門を見せる三毛に吐き捨てた。それだけでは侮られたような羞恥が拭えないで、猫へ向けて伸ばしていた手をひっこめ、眉間のあたりを搔いてごまかした。

そこへ襖から未央子が出てきた。どうかしたの、と隣に膝を折る。

——目も合わせちゃくれない。

——そんなに怖い顔してるからじゃないの。

——怖いことなんかないよ。だいぶおもねってみたんだ。

啓介は三毛へやったのとおなじように未央子に向けて舌を鳴らしてみる。未央子はふふと笑い、首を向こうへひねって猫の姿を見遣った。昼のうちに熱を溜め込んだ沓脱石をここぞとばかりに占有してぬくぬくと丸まっている。光よりも色をあらわしていく暮れ方の陽が、白い毛並をぼんやりと包みこむ。

おなじ光を未央子のうなじも受けた。これから身体も重くなっていくばかりだからすこしは軽くしておかなくちゃと、近頃大胆に短くした妻の髪に啓介はまだ慣れない。ゆるやかに窪んだ首筋に、やわい産毛がちらつくのを見るたび、湧き立つより前に背筋のあたりがこそばゆくなくなってしまふ。

そのうなじが、今は射し込む光の中で汗ばんでいた。

——なんだ、働いてたのか。

——ちよつと。おじいちゃんのベッドを入れるときに、余計な荷物、まるごと二階に上げたじゃない。今度降ろすときに楽なように整理しておこうかと思

つて。

——わざわざ今日やらなくたっていいじゃないか。

——そうなんだけど。だけど啓ちゃん、二階がどうなってるか知らないですよ。すごい散らかってたんだよ。一度気になったらうずうずしちゃって……

未央子は両手の指を絡ませながら言う。

——とにかく今日はもう休もう。晩も出前にすればいいんだ。お茶でも淹れてくるからここで待ってなさい。

そう言つて啓介が膝を立てるより早く、私がやりますと未央子が腰を浮かせたものだから、啓介は慌てて彼女の肩を押さえた。しかし押さえた相手の、立とうとする勢いが思いのほか力強かったのでよろけてしまった。

いいから、俺がやるから。動くんじゃないぞ。中腰の姿勢で脅し文句を並べる啓介に、未央子はハイハイと肩をすくめた。

襖を開けて和室に踏み入ると、とつぜん、ひんやりとした空気に包まれた。陽が傾くと縁側からの光も射さない八畳は、周りと比べて一段深いところに敷かれているようだ。その中でも、今朝まで置かれていた介護ベッドの、四点の足跡が、判を捺したようにまるい陰を埋めこんでいる。五年……その歳月と、畳に食い込んだ跡と、結びつけようとしてうまくいかなかった。

——すっきりしちやいましたね。

背後で未央子の声があった。ああ、と振り向くと、上体を振じつて、両手をこちらにつく妻の姿があった。かるく浮わついた顎の輪郭や、急にねじれる腰の線が、奥でちらつく砂利の一粒一粒、葉の一枚一枚に呼応して、ぼやけていくようで、ずいぶん遠くにいるような気がした。するとやがて、自分の立つ畳の上がひどく陰湿な場所に感じられてきて、啓介は、もう向こうには戻れないんじゃないかと、大仰とわかっていながら思わざるを得ない。

——そうだ。緑茶はよしてね。カフェインはだめっていうから。麦茶がいいな。できれば温かいと助かります。

その妻の言葉に弾かれたように我に返った。かるく頷いて台所へ向かう……  
畳が出る間際にまた振り返った。

——鼻歌でも歌っててくれないか。

——どうして。

未央子は驚くより前に前に笑っていた。

その笑みに縋るように言う。

——こわいから。

——うん。いいよ。

急須と湯呑をのせた盆に集中していたら、ついさつき暗さに覚えた孤立感はないまま、すんなりと縁側に戻れた。未央子は正座を崩して庭を眺めていた。啓介を見返り、大丈夫そうねと眉を上げる。

——大丈夫だった。でも、歌っててくれなかっただろ。

啓介はわざと恨めしく言って腰を下ろした。そうしてふたりの膝のあいだに盆を置こうとして、未央子の腿の上に三毛の鞆がうずくまっているのを見つけた。

——ちゃんと歌っていたんだけど、途中でこの子が来ちゃって。

三毛は八の字を逆さにしたように目を細めて、急須の口から立つ湯気に鼻をひくつかせている。その顎の下から脇腹にかけて、未央子の長い指がゆったりとしたリズムで這っていた。何遍も何遍も……おなじひとときを繰り返している。

——未央子には懐くのか。

——懐くなんて、私たちとづくに親友よ。啓ちゃんが働いてるあいだ、私も

この子もずっとここで一緒だったんだから。

未央子は誇るようにつんと鼻を伸ばす。その姿勢と言い草に、重い荷物を後ろへ隠すような気遣いを感じて、啓介は、悪かった、と唇を噛んだ。悪いな。悪いな。今まで何度も妻にかけてきた言葉が、今日になってはじめて過去の私たちをとった。

それでも未央子は啓介の謝罪をまともに受けたことがない。いつもあっけらかんと払い除けてしまう。

——私、元気だったでしょう。おじいちゃんにどれだけ楽しませてあげられたかはわからないけれど、私はね、思ったよりちゃんとやってこれた。

そう思いませんか？ と膝にのせた猫に言う。そうだな。啓介は急須から麦茶を注ぎながら、曖昧に返した。

祖母を亡くしてから祖父はこの実家に独居していた。両親は二駅離れたマンションに住み、二十歳を過ぎたばかりの啓介は塗装工として働きながら東京のアパートでまだ学生だった未央子と同棲していた。それが二年ほどして、祖父の家から家具を倒すような音が響いてくる、夜半呻き声がつづく、門前でぼろりと空を仰いだまま隣人の声掛けにも応じない、といった知らせを両親が受け、啓介も含めて集まることになった。

両親も啓介も、なるべく祖父の意向を尊重したいという思いでは一致していたものの、今のまま実家にひとりで、というわけにはいかない。定年を間近に控えた父の忙しなさや母にかかる負担を考えれば両親が預かるのも現実的ではない。かといって啓介のほうも、未央子が就職したばかりで、ひよんな拍子で結婚も決まってしまった慌しい時期だった。啓介は未央子連れて祖父の実家に移り住んでも構わないと言ったが、両親が未央子を心配して反対した。それ以上押し切ろうという意気も当時の啓介には持てなかった。それで、父が定年を迎えるまでの一年間はとりあえず、実家近くのマンション一階を改装して新

しくできた、宿泊可能な民間施設へ預けることになった。

ところが三か月もしないうちに退所することになる。週に何度か着替えを持っていく母が、施設での祖父のようすがおかしいと言いだしたのだった。元気がないというところからはじまって、職員に邪険にされている、行きたびに頭を抱えてもう帰りたいと嘆く、あんなに弱ったお義父さんははじめてだと、最後は半ばヒステリーを起こして父に泣きついたという。父ははじめ相手にしなかったものの、半信半疑のうちに調べてみると、夜は資格もない学生ひとりになり、数人の相手をさせていたり、毎日欠かさないと言われていた入浴も実はまぢまぢだったということがわかり、母の訴える真偽はともかく、これ以上預けておくわけにはいかないという結論に至った。

思いのほか症状が進行していたことは、両親のマンションに引き取ってすぐにわかった。四六時中部屋の中を歩きまわって、昼夜問わず外へ出たがる。それまでほとんど話すこともなかった幼少期の話を延々と繰り返すようになった。危なくて火の元にもベランダにも玄関にも近づけられない。かといってひと所に縛っておくわけにもいかない。あんな施設に預けるくらいならとひとりで懸命に世話をしていた母の気力も半年と持たなかった。

その後、特別養護施設の審査に落ち、老人ホームは経済が許さず、今度は未央子も交えた四人で話し合うことになる。

歳の瀬の明け方だった。祖父がようやく寝静まったころ、四人でダイニングテーブルを囲った。フロアリングに吸われた夜の冷気がエアコンの温風を押し返して、足元がひどく凍みた。予兆があった時点でケアしていれば。どうしてあんなところに預けてしまったのかしら。母は顔を覆って嘆くばかりで、父はそんな母を慰めるのにも疲れ果てたようだった。啓介にしても、よし自分が預かると言ったところで母とおなじ負担を未央子にかけてしまうことを考えれば半端に口を開けない。そもそも途方に暮れるしかないということが、みな集

まる前からわかっていた。ちゃんとした預け先が決まるまで母には今すこし我慢してもらうしかない、誰が言葉にする必要もなく誰もが理解していて、陽が昇りきるころには、みなきつと納得しているはずだと信じながら、とにかく時が経つのを待つしかない。

扉が開け放たれた寝室で祖父が布団をかぶって眠っている。鼻づまりの寝息が立つ。時おり母の掠れた嘆き声が入る……

その、沈黙と変わらない刻々を、未央子が裂いたのだった。

私たちが預かりましょう。アパートも出て、おじいさんの家で見ます。啓介さんには仕事をつづけてもらって、私はしばらく休みをもらいます。

口火を切ってからは止まらない。旗手を担ってずんずん先へ進んだ。朝には祖父を連れて実家に戻り、翌週にはアパートを解約した。介護が長引きそうだとわかったころにはベッドやトイレの手摺など必要な準備を整え、休職のはずだった仕事も辞めていた。いずれ辞めるつもりだったと後悔するようすもない。

祖父も実家に帰ってからはだいたいぶ落ち着いたようだったので、はじめは遠慮していた両親もずると甘えるようになった。未央子のおかげで一時は困憊していた母も活力を取り戻し、週に半分は手伝いに赴くようになる。

対して、介護にしる家事にしる、まるで勝手を知らない男たちの肩身は狭かった。すっかり親父に新婚生活をとられたなど、父は啓介を小突き、顔を忘れられないくらいには来いよと啓介は父をからかう。親子で晩酌を交わす夜が増えた。

結局、寝たきりになるまで衰弱した最後の一年も含めた五年のあいだ、未央子は休むことなく世話をつづけた。先週、最期を看取ったのも彼女だった。まだ陽の昇る前に起き出し、いつものようにおしめを替えようとベッド脇に立って、息を潜めた。別の部屋で寝ている啓介を起こそうかとも、両親に連絡すべ

きかとも思ったが、目を離してはいけなないと察したらしい。それから五分となかつた。朝、両親が来て、もう静かなベッドを四人で囲った。みなが未央子に深く頭を下げた。

——ずっと興奮してたのかな。

——そうさ。ハイになってたんだよ。今も興奮が抜けないから部屋の散らかり具合なんかが気になったりするんだ。細かい始末は正気に戻ってからでいい。

——正気なんておおげさよ。

——おおげさなんてことないさ。

未央子は呆れたように会話を切って、猫の上にこぼさないよう注意深く湯呑を持ち上げた。やさしい息で湯気を払う。唇や睫毛が、湿っぽく、重たくなる。首筋から横に流した脚の先までしなやかに反っている。だが重心は尻のあたりに構えて、ひょんなことでは動きそうもない。海棠の木もこんなふう根を張る。

やはりおおげさでないと思う。

徘徊や妄言を繰り返す祖父の相手をしながらも、未央子はむしろ生き生きとしていた。

老体から精気を吸い取って悦ぶ人がある。こどもの看病を楯に自らの居場所を死守しようとする人がある。奉仕の上に立たなければ足元も覚束ない。弱者の中にしか棲みつけない。福祉に就く人の中にも少なくない。

しかし妻からはそういう類の人が持つ焦りや疲労を感じたことがなかった。祖父を見ながら自分を見ない。自らを省みるとき祖父を引き合いに出さない。無駄な混同がないから混乱もない。お互いの調子に合わせて関わり方も変えた。関わるときは殊更愉快な声も上げない。穏やかだった。いつ踏み外してもおかしくない危うさを背負いながら、きつと偶然のちからも借りて、祖父と未央子



の場合はいまよく均衡を保ちつづけたのだろう。

啓介が未央子の夜を欲しがると日が増えたのもそれと無関係でない。まさか祖父に妬いているのかと思つたがそうではないらしい。結婚を機にした占有感に浸れるほど余裕もなかった。しかし、母性といつたらいいのだろうか。祖父と接することによつて未央子のからだから醸し出されるものがあった。昼夜を問わない。粉末薬をオブラートに包む器用な指先から、ベッドから起き上がらせるために踏ん張つた中腰から、あるいは燦々たる陽射しを浴び、祖父のとなりで草をむしる、たくし上げた袖の隙間から……自分の知らない妻のにおいを感じ取れそうな気がして啓介は唾を呑むことがあつた。

結婚する前には感じ得なかつた。行動力はあつたがどうも慌しく、無理をしてよく体調を崩した。女性が生まれながらに持つ、ませた感じを、未央子の場合はむしろ自分で気がつかないでいる。だから色気が育たない。幼さを感じることのほうが多かつた。

結婚に踏み切つたのもそんな彼女のせつちからだつた。

その日、啓介は泊まりがけの仕事を終えたあとで、先輩職人を乗せて長い帰路を運転していた。全員を送り届けてアパートに戻つたのはとうに更けたころで、音を立てないようにドアを開けるとしかし、暗い部屋の真ん中で、未央子が膝を抱えてうずくまっている。常夜灯の頼りない明かりが潤んだ目玉ばかりをうきぼりにしていた。

普段は玄関で脱いでしまう汗とペンキまみれの作業着をそのままに、未央子のもとへ這い寄つた。どうした。何があつた。簡単に応えないだろうことは察していながら何度も訊ねた。

生理が来ないのという掠れ声を聞いたのは、啓介がもう疲労と眠りに挟まれてうつろうつろしはじめた時分だつた。未央子は膝のあいだに埋めていた頭をいつの間にか持ち上げて、啓介の頭上をぼうっと眺めやっていた。決定的な口

ぶりで、覚悟を迫るような姿勢だった。真に受けるしかなかった。

その夜は結局眠らなかつたことだけを覚えている。なんとか安心させようと思いをかけたつもりだったが、啓介自身、そういつたときの文句を備えているような男ではない。大丈夫だ、と何度か口調を変えて言ってみたこと以外、ろくな言葉もかけられなかつた。気がつけば未央子の背中をさすっていたのも、途中でどうも見当はずれな気がしてやめた。

あとはずっと自分の顔を掻いていたような気がする。気づけば未央子のほうが丸まったまま先に眠っていた。

朝になり、未央子の寝ているうちに届をもらってきた。大丈夫だと言った責任の取り方がそれくらいしか浮かばなかつた。未央子が就職したばかりだということを考えればタイミングが悪いけれども、いずれこういうかたちを取るつもりだったのだからと腹を括った。

それが、その日の午後にはすべて未央子の勘違いだったとわかった。医者に、環境が変わったことによるストレスだろうとあつけなく言い放たれたらしく、すっきりとした笑顔で帰ってきた。一度も診てもらわずにあんなに絶望していたのかと咎めると、あなたが二日も帰ってこないで、仕事もきつくて、何が何だか、すっかり動転しちゃって、ごめんなさいと、いやに潔く頭を下げられたものだからそれで騒動は落ち着いてしまった。

届の用紙だけがふたりのあいだに新しく残った。翌週には提出が済んだ。お互い、引くに引けず、始末もつけられなかつたのだった。それで今度はふたり同時に腹を括った。判を捺す際に、勢いが大切っていうものねと、未央子は自らの早とちりをごまかすように唇を舐めた。

そのときの表情はやはり幼くて、今、目の前にある妻の表情と重ね合わせてみると、ベッドの足跡を目にしたときよりもよほど歳月を感じる。

大人になったんだな、と言いかけて、頑張ったな、と言ひ直した。

未央子は驚いたように肩を竦めた。それから膝にのせた三毛へ俯いて、褒められちゃった、とその額を指先で叩いた。三毛は首を振って嫌がった。尻尾が大きく振られて未央子の膝元に置いてあった湯呑を倒しそうになり、啓介は咄嗟に湯呑を持ち上げた。

——ありがとう。

庭に茜色の光が射し込んでくる。塀の向こうを男の子たちの声が通った。遊びつくした満足感と、別れる直前まではしゃいでいた名残惜しさとが縋い交ぜになって、春らしい風もない空へ舞って散る。

未央子は過ぎていく声を目で追って、ふふ、と笑った。わざと声に出してみただふうだった。

でもね、と話し出す。

——でもね、一番頑張ったのはおじいちゃんよ。最後はお庭にも降りられなくなつて、それでも一年以上我慢したんだから……お庭、もうすこし綺麗にしてあげていけばよかった。それでたまにはお庭のほうへ身体を向けてあげればよかった。最後のほうは天井ばかり見せちゃっていたもの。それだけはね、ちよつと後悔してる。

二度目の話し合いのあと実家へ連れて戻るなり、祖父は手入れの滞った庭を見て激怒した。なんだこれはと野太い声を響かせたかと思うと、ほとんど跳ぶ勢いで縁側から降り、裸足のまま砂利の上に立って辺りを見回し、それからすぐに雑草をむしりはじめた。

啓介はそれを見て連れ戻そうとしたのだが、未央子が制して先に庭に降りた。そうして祖父にサンダルを履かせるといっしょに草むしりをはじめたのだった。啓介はふたりがせっせと働き出したのを呆気にとられて眺めるしかなかった。思えば未央子に妙な色気を感じたのもそのときがはじめてだったかもしれない。



ら鍋を引っ張り出してたって言うんだよ。

——そこまで話が進むと怒り出すのよね。

——そう。鍋なんかどうでもいいだろうって、俺に怒鳴るんだ。鍋なんて持っていないのに。それから裏の防空壕へ母親の手を引いていこうとする。俺も何度も手首を掴まれたよ。

——私も。尋常じゃないよね、あのちから。でも、それからは悲惨よね。何度聞かされてもちよっと堪えられなくなるときがあったもの。もうやめてよって怒鳴りそうになったこともあった。

——ああ。引き摺りこまれるから。記憶に。

防空壕へ足を踏み入れた直後、轟音が響いた。二三向こうの通りから黒煙が上がっている。見上げると隊列を組んだ十字架が晴天を裂いて飛んでいく。次から次に……戦争最後の年の五月二九日。何度も聞かされて覚えてしまった。誰も警報には慣れていたが、一向止まない爆発音に防空壕の中から飛び出してきたしまう人が出てきた。するとつられてパニックを起こす人たちが逃げ惑う。壕の入口付近にいた少年の祖父はもみくちやにされて外へ掻き出された。目前で焼夷弾が破裂した。どろどろとした液体が飛び散り、電柱や家の壁に絡みつき、次の瞬間には炎が上がった。さっき自分が帰ってきた道で人が燃えていた。声にならない悲鳴を上げている。そいつの声か、自分の声かわからない。母親の姿がない。おい、何ほけつとしてんだ。走れ、走れ……

すうっと、夫婦の吐く息が揃った。啓介は苦々しく笑った。

——その話がさ、俺にはぜんぶ白黒に映るんだよ。なんかあざといだろ。結局テレビやドラマなんかで知ったことを俺が勝手にじいちゃんの記憶につきはぎしてるんだよ。だから、つらいななんて落ち着かせようとしたところでよけいに暴れさせちゃった。

——そんなものよ。私だってうまく寄り添えたことなんてなかった。おじいちゃんだって自分の戦争体験を伝えたいわけじゃないからなかつたでしょう。パニックになるとほんとうにその時代に戻っちゃうんだから……

そうだな、と言って啓介は麦茶を啜った。すっかり冷めていて、唇がひんやりと濡れた。飲み込む前にもう一口喉に流し込んだ。

ひと息ついてから訊ねる。

——なあ、じいちゃんに謝られたりしたか。

——謝られたこと？ 啓ちゃんは？

——いちどだけ。

ある休日、未央子が買い物に出ているあいだに祖父が便を漏らしてしまった。排泄もコントロールできなくなってきた時期ではあったが、未央子のいない隙に催すことは稀にもなかったのだから戸惑った。それでとりあえず替えのおしめを握ってトイレに連れて行ったのだが、そのときも祖父は記憶の中にいて、何もありません天井を虚ろな表情で眺めながら、逃げる逃げろと呻いていた。ズボンを脱がそうとしても聞かない。押さえつけようとしても抗う。ちよつとのあいだ協力してくれと顔をこちらへ向けて諭しても、視線は啓介を捉える手前でぶつんと途切れてしまう。宙に別の何かを見ている。そしてまた、どうしてこんなところにいるんだと喚きはじめる。

未央子はいつもどうしているのだろうと途方に暮れていたら、また祖父の動きが止んだ。

身体の強張りが一気に失せて、立っていられるのが不思議に思えるほど放心した状態で黙っている。

そうしてとつぜん啓介の視線を掴まえた。

すまない、とこぼした。

——意外と正気だったんじゃないかと思うんだよ。

幼いころに惨劇の中へ放りこまれ、気も体も盛んな時期を瓦礫の中で過ごし、信じられるものをはじめから失った状態で、信条に値う欠片を拾い集めながら、自身を差し置いて土台を築いていかなければならなかった時代……築く、という行為を、忘れるための手段として乗り切ろうとした人があつたかもしれない。徒勞と知りながら青春の埋め合わせに奔走した人があつたかもしれない。とにかく、生き急いだはずだ。

それが突つ走つた挙句、表舞台から退けられ、体力も落ちてくると、自身の言動によって自らを奮い立たせつづけることができなくなる。元から確固たる身の置き場もなければ息をつく閑も知らないから、途端に足場が揺らぎはじめる。すると、あの時代を奔つた人の、生きようとするちからの強引さが、勢い余つて幽明の境を踏み切つてしまう……そういったことがあつてもおかしくないと思えた。

老いや死を目前に晒されて尚正気を保つことの難しさ……それを思えば生き長らえる最後の手段として、核心に正気を遺して肉体から意思を切り離すことが、ありうるのではないか。

——やることなすことめっちゃくちゃだったけど、きつと奥のほうではちゃんと俺たちのこと睨んでたぞ。

そうかもね、と未央子は穏やかに頷いた。

——それで、お前はどうかだった。謝られたことなかったか。

啓介が訊ねると、未央子は、私？ と背筋を伸ばした。

そうして恥ずかしそうな笑みを浮かべながら応えた。

——私は、しょつちゆうでしたよ。

そう言つて頬に引つかかつた横髪を指先で払つた。引き攣つたような笑みが得意げな感じに変わつていた。

啓介は思わず溜息をついた。完敗だよ、と傾げた首筋を搔く。恥ずかしさが移ってきたようで、笑うしかない。

——お前の前じゃずっと正気だったのかもしれないな。案外、身体拭かれながら興奮してたかもしれないぞ。

——ちよつと、やめてよ。

未央子は啓介の肩を叩いた。

その手が離れないで、そのまま二の腕をずるずると凭れていき、肘のあたりをやわく掴んで止まった。前のめりになった未央子の重みを感じる。シャツを通して手の熱さを感じる……猫が未央子の腿からするすると抜け出し、庭へ出て、どこかへ消えた。

橙色の光がいつそう濃く射して、庭にあるどの影も伸びていた。夜闇が注がれて全部がひと括りにされる前に、花卉や葉や石、それぞれが主張する。どれが厚かましいでもない。出しゃばるでもない。ただ毅然とかたちを顕すばかりだった。

ひよつとしたら輪郭ができる時間というのは夕方のある一時に限られているのではないか。花も、モノも、未央子も……

そうだ、と啓介はおもむろに呟いた。未央子の手が離れる。

身体が離れてからも、未央子はどこか未練がましい景色を表情に残していた。

——どうしたの。

尖った口調で言う。

——ちよつと木のあたりに立ってくれよ。

啓介は未央子に構わず奥の海棠を指差した。

どうして……いいから……休めて言ったじゃない……すこしのあいだだよ

……



未央子は怪訝そうに立ち上がり、サンダルを履いて庭へ出た。砂利を馴らすように摺り足で海棠の傍まで歩いていく。

ここ？ と振り向いた。

——ああ、もうすこし寄って。

そう言いながら啓介はポケットから携帯電話を取り出し、カメラレンズをかざした。

——ちょっと、何してるの。

画面の中で未央子がこちらへ戻ってこようとす。

啓介はそれを空いたほうの手で制す。親指をシャッターボタンに構え、画面を凝視したまま言う。

——戻って戻って。ほら、何かポーズ取ってくれよ。

——無茶言わないでよ。

——何でもいいから。

——何でもって……ピースでもいい？

——ピースか……ピースは、なんかちがうな。

——何でもいいはどこいっちゃったのよ。

未央子は不満げに文句を垂れた。そうして尖らせた唇を指でつまんだ。

ストップ！ と啓介は思わず上擦った声を上げた。そのまま、そのままだぞ……シャッターを切る。そうして海棠の隣で驚き立ち竦む未央子を差し置いて、撮り終えた画面をしげしげと見つめた。すこし間があって、ううん、と首を傾げた。

——ちょっとぶれたな。もう一回。

——もう一回？

——今のだよ、今のポーズ。

——嫌よ。もうできない。

——どうして。良かったのに。

——だって恥ずかしいもの。

——仕方ないな。そしたらもうすこしそこに立ってて。そっちじゃない、もつと寄って。うん、そこ……うん。撮れた、撮れた。

啓介はまたしばらく画面と睨み合い、未央子に向けて今度は指で輪をつくつた。

液晶の中に納まった未央子は、海棠の傘の下で、そのときちょうど舞った風に煽られて、短い髪が流されている。額があらわになり、傍に寄せる花卉がその白い肌を焼くようだった。写真に取り込んでしまうと影の濃さは薄れてしまい、横なぐりの西陽にすべてが浚われそうな危うさが写っていた。

時間が経つにつれ、花卉の鮮やかさだけを遺して、未央子の姿も消えてしまふのではないか……と、啓介は顔を上げた。おなじ未央子が立っている。指先で花を撫でていた。

撫でながら、顔だけゆっくりと振り向いた。

——撮れましたか。

——うん。撮れたよ。しかし海棠に美人は合うな。

——何言ってるの。花のことなんかちっとも知らないでしょう。

——そんなことないさ。海棠はあれだぞ、楊貴妃にも喩えられるんだ。

——もう。そんなの知ってます。おじいちゃんの受け売りじゃない。

未央子は呆れたように笑い、それより撮ったやつ見せてよ、と花から手を離してこちらへ戻ってきた。

ところが、何歩か歩いたところで急に砂利を踏む音が途絶え、姿が消えた。

気づくと胎を抱えてうずくまっていた。

啓介は慌てて駆け寄り、大丈夫かと肩を抱いた。未央子は地面へ俯いたまま動かない。ちからなく開いた口から息を吐く。吐く息のか細さに比べて肩は大

きく上下していた。

しばらく見守るしかなかった。肩にのせた手のちから加減みたいな些細なところが気になってしまい、声もかけられず、狼狽するばかりだった。

それがやがて、未央子のすうすうと漏れる息の中から声が混じるようになり、啓介はその口元へ耳を寄せた。

……んこきゅう……しんこきゅう……

そう繰り返している。

啓介は大きく頷いて、そうだ、深呼吸、深呼吸。と連呼した。妻のリズムを打ち壊すくらい張り切った声を上げていた。

だんだんに呼吸が整ってから、未央子は最後に一番深い息を吐き出し、啓介を見上げた。

三日月のかたちをした目縁に涙が溜まっている。肩を抱いた啓介の手にちからが籠もる。

——もう大丈夫。ありがとう。

——だいぶ疲れてるんだろう。

——うん。介護よりモデルのほうが疲れる。

冗談に笑う未央子に啓介は応えないで、視線を落とした。未央子の手はまだ胎をさすっている。

——まだ慣れないか。

——どうなんだろう。

——蹴られたりとかするんだろう。

——そんな。もつとずつと先の話よ。今は、意識しないと忘れちゃいそうなくらいだから、忘れないようにするのが大変。

——そうか。ずっと先か。

ずっと先。言い直してやはり実感がなかった。男には理解できない時間の感覚なのかもしれない。

肩を抱く啓介の手の上に、未央子の掌が重なった。縁側で凭れたときよりもずっとかろく、ずっと冷えている。

——ねえ。

——うん。

——名前。おじいちゃんから一文字もらいますか？

——そうだな。

啓介はほんやりと庭を眺めやった。

動くもののない景色の中で、考えるでもなく時間を待ち、また妻に向き直る。

おだやかに応えた。

——もっと後になってから考えようか。

——そうね。

——その前に、あいつに名前をつけてあげようか。

——あいつ？

——さっきの猫。

——そうする？ けど喜ばないと思うわよ。

——そうかな。

——たぶん。

そう言いながら、いつの間にか未央子の眼差しは啓介の頭上にあつた。振り向くと夜空が蒼く薄く敷かれはじめていて、そこへ三日月が立っていた。月の真下で傘を張る海棠は、日中の陽射しに透けるような軽さも、西陽を浴びた色の濃さも、もうなくしていたが、薄紅の名残りを遺しながら変わらず俯きつづけている。

暗く湿った空気が襖の奥から縁側を這い、庭へ注がれていた。

帰ろうかと言った。

(了)